

19 世紀ヨーロッパの日本語学

—J. J. ホフマンとレオン・ド・ロニーを中心に—

北川朋子

Japanese Language Studies in 19th Century Europe:

J.J.Hoffmann and Léon de Rosny

KITAGAWA Tomoko

1. はじめに

私たちが他の地域の言語を学ぶことにはさまざまな動機や理由がある。日本においても古代から現代に至る歴史の中で交易、外交、文化交流、軍事的戦略、布教活動などさまざまな理由から多種多様な民族が接触して、その人々が使用した言葉を通して互いに交流を深めていった。

現代では、我が国において 2019 年末からコロナ禍の状況が始まり猛威を振るったが、2023 年 5 月に新型コロナウイルスは感染症の位置づけが「2 類」から「5 類」へと移行し¹、ようやく日常生活が戻りつつある。だが、今もなお警戒は続いている。そのコロナ禍において日本へ入国する外国人留学生の人数は激減し、日本語学校や大学に大きな影響を与えた。その後コロナの影響がすこしずつ収まり、海外渡航や国内への入国の規制が緩和され、再び日本語教育機関に留学生が戻ってきた。そして以前のように日本語学校に活気がよみがえってきた。その中で私が勤務する学校ではネパール、ミャンマー、ベトナム出身の留学生が多く所属しているが、その一方で少数ではあるが欧米出身の留学生がいる。その中には戦禍を逃れて来日したウクライナの学生、フランスや北欧出身の留学生もいる。彼らは熱心に日本語を学習し、それぞれ自分の目指す進路に向かって研鑽をつんでいる。そのような欧米出身の彼らと接しているうちに、アジア地域から日本に来ている留学生とは違う目的意識をもって来日し、日本語を真剣に学ぼうとしていることを感じた。そこでヨーロッパ地域において日本語教育とはどのような位置づけがなされているのか、その歴史はいかなるものであったのかに興味を覚えた。そのためにヨーロッパにおける日本語研究についての足跡をたどり、現在に至るヨーロッパの日本語教育の歴史を概観していきたい。特にこの研究ノートでは、私が大手前大学の日本語教員養成課程で日本語教育をご教授いただいた高見澤孟先生の論文集「日本語教育史」のご研究を中心に紹介し、ヨーロッパにおいて本格的に日本語学の研究が開始された 19 世紀に注目し、その代表的な研究者である J. J. ホフマン (J. J. Hoffmann 1805-1878 年) とレオン・ド・ロニー (Léon de Rosny 1837-1914 年) の業績の一部を考察していく。

1. 19世紀における日本と欧米諸国の関係

18世紀になると欧米諸国によるアジアへの関心が高まった。日本周辺においてもオランダ以外の外国船の来航が相次いだ。江戸時代末期にヨーロッパ諸国との修好通商条約の締結によって、欧米諸国は日本に対する関心を高めて、日本語の研究や学習がオランダやロシア以外にも急速に広がった。日本とフランスの両国が継続的に交流を開始したのも1858年の日仏修好通商条約の締結以降のことである。さらに、1867年と1878年のパリの万博博覧会への日本の参加は科学技術、政治経済、文化的な交流という日仏間の新たな幕開けとなった。ⁱⁱ

2. ホフマンの日本語研究

江戸幕府は1612年のキリシタン禁令以来、外国人が日本語の学習を行うことを警戒し、オランダ商館との通商や交渉も幕府公認の日本人のオランダ通詞に行わせていた。このような幕府の厳しい政策もあって、日本国内での外国人による日本語研究はロドリゲス(Rodorigues 1561/1562-1633年 ポルトガル人のイエズス会士)時代に比べて大幅に衰退していた。そのためヨーロッパにおいてもロドリゲスの著作による日本語研究が依然として重要な資料として引き継がれていた。

しかし幕末期に入ると、幕府のキリスト教に対する禁令が弱まり、ヨーロッパ諸国は貿易や軍事的な拠点として日本への関心を高めていった。その中でオランダ商館の関係者が日本学の研究を担った。その代表的な研究者たちは出島の三学者と称されるツンベルグ(Thunberg 1743-1823年『日本紀行』)、ケンペル(kaempfer 1651-1716年『日本誌』)、シーボルト(Siebold 1796-1866年)が挙げられる。特にシーボルトが日本に関する膨大な資料を持ち帰ったことによってヨーロッパの日本学の研究が推進されることになった。

シーボルトが持ち帰った資料を綿密に研究してヨーロッパにおける日本学を発展させたのがホフマンである。彼は1830年、25歳の時にベルギーでシーボルトに出会い、シーボルトの日本についての話題に興味関心を持ち、彼の助手になることを決意した。それから日本学の研究を本格的に開始した。

1833年にホフマンはシーボルトとの共著として『日本書誌』(Bibliotheca Japonica)を発表した。そして1851年にオランダのライデン大学においてヨーロッパで初めての「日本語学講座」が設置され、その初代の日本語学教授にホフマンが任命された。

さらにホフマンはオランダ商館の商館長を務めたフルチウス(D. Curtius 1813-1873)が執筆した『日本文法試案』の草稿の改訂と内容の補筆をして1857年にライデンで出版した。

ホフマンは実際のところ日本を訪れたことがなく、ヨーロッパにある研究資料で日本語を学んだ。だが1867年に幕府からオランダへ派遣された榎本武揚(1867-1908年 幕臣、政治家)や西周(1829-1897年 啓蒙思想家)といった日本人から直接日本語を学んだという。

1867年、オランダ政府の委嘱によりオランダ人向けの日本語学習用教材『日本文典』

(Japansche Spraakleer) を刊行した。この著書は先行研究を受け継ぎながらも自らの研究を加えて今までにない新しい日本語の文法論を示している。

例えば、品詞の分類ではヨーロッパにおいてロドリゲスの研究以来、伝統的に踏襲されてきた8分類(8品詞:名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞)の形式がとられている。特にホフマンは「動詞」の下位分類についてもロドリゲスの『日本小文典』の動詞の活用の形を参考にしていると考えられる。

屈折語系ⁱⁱⁱであるヨーロッパの言語を母語とする人々にとって日本語を学習する際に、動詞を語根と活用語尾に分けて語根を基本形とするほうが理解しやすいので、ロドリゲスもホフマンも日本語の動詞の連用形を基本形として、辞書などの提示形(辞書形)としている。^{iv}

参考資料 1

高見澤 孟「日本語教育史(4)」『昭和女子大学 學苑』No. 780 (2005/10/1) p. 4.

ロドリゲス 『日本小文典』	第一活用型動詞 語根が(子音+)エ で終わる 比べ (curabe-masu)	第二活用型動詞 語根が(子音+)イ で終わる 飛び (tobi-masu)	出典:岩波文庫 『日本語小文典』 池上岑夫訳
ホフマン 『日本文典』	無屈折動詞 ① 語根がイで終わる 見る(mi-masu)	屈折動詞 語根がイで終わる 行き(iki-masu)	出典:八坂書房 『西洋人の日本語 研究』 杉本つとむ著
国文法	上一・下一段動詞	四段動詞	

3. フランスの日本語学者レオン・ド・ロニー

18世紀後半からフランスにおいても東洋の研究が開始される。19世紀までに中国学が積極的に行われるようになり、優れた中国学の研究者が輩出した。1823年にはパリにおいてアジア学会が発足し、1825年に東洋学者のクレール・ド・ランドレス(C. Landres 1813-1879年)はロドリゲスの『日本語小文典』をポルトガル語からフランス語に翻訳した。この著作は現在フランス王立図書館に所蔵されている。

レオン・ド・ロニーも当初は東洋語学校で中国語を学んだ。その過程で日本語に触れることにより、上述のランドレスの『日本語文典』やシーボルトの『四体千字文』^vなどを用いて日本語を独学した。さらに1854年にわずか17歳にして日本語の学習書である『日本語学習に必要な基礎知識の要約』を発表し、1856年には『日本語研究序説』を出版した。

ロニーが初めて日本人による生の日本語に接触したのは1862年、幕府の遣欧使節団の接待係兼通訳に任命された時である。一行の中には福沢諭吉(1834-1901年 啓蒙思想家/教育者 『西洋事情』)や松木弘庵(寺島宗則 1832-1893年 幕末・明治の政治家/外交

官) が派遣されていて、彼らと親しく交流した。特に福沢は古典的な日本語であるが話せて読むことができる若いロニーに会って非常に驚いたようである。

この時代はナポレオン 3 世 (Napoléon III 1803-73 年 [在位 1852-70 年] フランス皇帝ナポレオン 1 世の弟オランダ王ルイ・ボナパルトの子) の治世下であり、1860 年にフランスとイギリスの連合軍は北京を占領し北京条約を結び、中国への進出の足がかりにした。1862 年にコーチシナ (フランス統治時代のベトナム南部を指す歴史的呼称) に軍隊を派遣し、第一次サイゴン条約を結び、コーチシナの一部を領有した。その時期にフランスにおいてアジアへの関心が高まり、日本学や日本語研究が発展した。

ロニーも数多くの日本語に関係する著作や論文を残した。その代表作の 1 つとして挙げられるのが 1865 年に発表した『日本語考』である。また、彼は日本語教育に関係する著作や論文以外に『古事記』や『日本書紀』の部分訳やそれらに関する研究論文を著している。^{vi}

4. フランスにおける最初の日本語の講義

上述したロニーの著書『日本語考』は当時のヨーロッパで入手できる日本語に関する資料や情報を網羅していた。彼は 1863 年からパリ東洋語学校に開設された無料の公開講座で日本語を教えた。さらに 1868 年に日本語講座が正規コースになったのを機に正式に日本語の初代教授に就任した。

彼はこの講座の教材として 20 巻から成る『日本語実用教程』(Cours pratique de japonais) を執筆して、フランスの日本語教育の基礎を築いた。その著作ではフランス人が学びやすい日本語文法の工夫がなされている。例えば日本語の助詞の説明では、日本人の研究者とは異なる方法をとっている。それは膠着語である日本語の助詞を自立語に付着する機能語として扱わず、屈折語における格変化として教える方法をとっていたと思われる。

参考資料 2

高見澤 孟「日本語教育史(4)」『昭和女子大学 學苑』No. 780 (2005/10/1) p. 9.

格	格変化
主格 (Nom.)	ヒトハ
属格 (Gén.)	ヒトノ
与格 (Dat.)	ヒトニ
対格 (Acc.)	ヒトヲ
奪格 (Abl.)	ヒトヨリ

ロニーの解説では、膠着語である日本語の「名詞+助詞」の構造を用いず、ヨーロッパ諸語の格変化の形式のように扱っているが、これはフランス人の学習者が理解しやすく、かつ日本語の使用において支障をきたすことがないことから、このような文法の説明になったと考えられる。いずれにせよロニーの精力的な研究と教育実践によってフランスにお

ける日本学や日本語教育の研究が大きく進展したことは事実である。^{vii}

まとめ

19世紀のヨーロッパ世界の中でホフマンもロニーもほとんど日本人との交流がなかったにもかかわらず、ロドリゲスの『日本語小文典』やシーボルトが持ち帰った多くの資料から日本学や日本語の研究を独学で推し進めていった。さらに、ヨーロッパの日本語学習者に理解しやすくするために日本語の文法の独自の解釈がなされていた。例えば両者とも膠着語である日本語について母語の屈折語の活用を応用して文法書を執筆している。

私も実際に日本語の授業をしていて、ヨーロッパ地域出身の留学生は論理的に文章を理解しようとする傾向にあるように感じる。そのため動詞の活用の変化にもかなり敏感で活用の規則を正確に理解しようとする。一方で、アジア地域出身の留学生は日本語の文法的確に理解するというより言葉を情緒的に把握する傾向があると思う。日常会話を優先して日本語を論理的に分析するということはあまり感じられない。したがって、ヨーロッパ地域出身の学習者にとってホフマンやロニーが採用した緻密な日本語文法の説明はヨーロッパの人々の気質に合った非常に有効な方法であったと思う。

本稿は19世紀ヨーロッパの日本語学の進展としてホフマンやロニーの研究の一部を取り上げた。次回の研究では今回取り上げられなかった二人の日本語学や日本語教育の研究をさらに深く考察していきたい。

ⁱ 厚生労働省（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）

ⁱⁱ 高見澤 孟「日本語教育史（4）」『昭和女子大学 學苑』No. 780
(2005/10/1) pp. 1-2.

佐々木 潤之介 他 編者『概論 日本歴史』吉川弘文館 2000年 pp. 153-161.

ⁱⁱⁱ 屈折語：言語の形態的類型の1つ。屈折を持つ言語。

インド・ヨーロッパ語族やアフロ・アジア語の言語の多くは元来これに属するが、今日では屈折の程度は一様ではない。（『広辞苑』参照）

膠着語：実質的意味を持つ語や語幹に機能語や接辞を付けて、さまざまな文法範疇を（名詞の格や動詞の法・時制など）を表す言語。日本語はその一例。

スワヒリ語・トルコ語・朝鮮語などがこれに属する。（『広辞苑』参照）

孤立語：個々の形態素が語としての独立性を持ち、語が語形変化したり、接辞を伴ったりすることのない言語。

中国・チベット語・タイ語など。（『広辞苑』参照）

^{iv} 高見澤 孟「日本語教育史（4）」『昭和女子大学 學苑』No. 780
(2005/10/1) pp. 2-5.

杉本 つとむ「J. J. ホフマンとその日本語学の背景
—19世紀ヨーロッパの日本語学素描—」早稲田大学 国文学会『国文学研究』
97巻 pp. 112-99. 1989年3月15日

v 『四体千字文』とは漢字の学習や手書きの手本として古くから使われていた書物のこと
である。『千字文』を4つの書体で書いたものを指す。

楷書・行書・草書・隸書が一般的である。

京都大学が所蔵する慶長11年(1600年)刊の『四体千字文』などが挙げられる。

vi 高見澤 孟「日本語教育史(4)」『昭和女子大学 學苑』No. 780
(2005/10/1) pp. 7-9.

森川 甫「フランスの日本研究 —歴史と現状—」
関西学院大学『社会学部紀要』第46号 1983年3月 pp. 39-44.

財団法人 自治体国際化教会 CLAIR REPORT NUMBER 063(MAR. 25, 1993)
「フランスにおける日本語教育の現状と課題」 pp. 1-4.

国立国会図書館 電子展示会 『フランスと日本』「日本語教育」参照
vii 高見澤 孟「日本語教育史(4)」『昭和女子大学 學苑』No. 780
(2005/10/1) pp. 7-9.

森川 甫「フランスの日本研究 —歴史と現状—」
関西学院大学『社会学部紀要』第46号 1983年3月 pp. 39-44.

財団法人 自治体国際化教会 CLAIR REPORT NUMBER 063(MAR. 25, 1993)
「フランスにおける日本語教育の現状と課題」 pp. 1-4.

国立国会図書館 電子展示会 『フランスと日本』「日本語教育」参照
[参考文献]
高見澤 孟「日本語教育史(4)」『昭和女子大学 學苑』No. 780
(2005/10/1) pp. 1-9.

杉本 つとむ「J. J. ホフマンとその日本語学の背景
—19世紀ヨーロッパの日本語学素描—」早稲田大学 国文学会『国文学研究』
97巻 pp. 112-99. 1989年3月15日

森川 甫「フランスの日本研究 —歴史と現状—」
関西学院大学『社会学部紀要』第46号 1983年3月 pp. 39-49.

財団法人 自治体国際化教会 CLAIR REPORT NUMBER 063(MAR. 25, 1993)
「フランスにおける日本語教育の現状と課題」 pp. 1-30.

国立国会図書館 電子展示会 『フランスと日本』「日本語教育」

大野 晋『日本語の起源 新版』岩波新書 1994年初版 2023年第27版

ヴァンサン・トゥロジュ、ジャン＝クロード・リュアノ＝ボルバラン著
越水雄二 訳『フランス教育システムの歴史』文庫クセジュ 2024年

フロイス著 岡田章雄 訳『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫 1991年